魔法戦記リリカルなのはForce外伝～フッケンバイン一家と裏に生きる者達～

織田上総介信長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ外伝～フッケンバイン一家と裏に生きる者達～

【Ｎコード】

Ｎ７８１２Ｘ

【作者名】

織田上総介信長

【あらすじ】

――――如何な世に善と悪を比べりゃ

残念ながら悪が勝つ

つもる恨みは尽きぬとも晴らしてやらなきゃ気がすまねぇ――

これは、管理局に実験材料として扱われ今でも生き残る者を主体にした描いた話です。

まぁ、ただのオリキャラなんすけどね

序章ミッドチルダと裏稼業（前書き）

何だかんだと上げてみましたこの作品。

まだまだ、レベルが低いかもしれませんがどうか暖かい目でよろしくお願い致します。

序章ミッドチルダと裏稼業

――世の中の善と悪を比べれば

どの時代でも悪が勝つ。

このミッドチルダも何の例外もあったもんじゃねぇ。

汚ねぇとこに足を一回でも突っ込んじまえば皆、悪と変わらねぇんだからよ――

世間がまだＪＳ事件とかいうもんが解決したばかりで管理局内がドタバタ騒がしい中

とある世界で税の横流しをしていた局員やら他の文明が遅れてる世界の若い女を性的に売買する局員と絡んでいた企業絡みの人間が何者かに暗殺されているというケースが増えてるらしく

その上、中には”仕事人”という”裏稼業”に頼めば金次第で晴らせぬ恨みを晴らしてくれるというのが話題として密かに盛り上がっている。

また、この”仕事人”金次第という形で貧困層で悩んでる人がどんなに少なかろうが必ず為し遂げているというのもあるが

依頼の大半は、十中八九どれも殺しの依頼しか無かったりする。

また、管理局もこの噂を知らないふりして全く捜査をしてない訳でも無いのだが

未だどの事件も凶器という凶器が見つかってなかったり何らかの強い魔法で殺った痕跡が無いのもあり

今では、何処の誰もわからない事から内部の者による何らかの目的だのはたまた反管理局絡みの組織が殺ってるんじゃないかと噂もあったりするが

真相は、未だに不明だったりする。

「今回見つかった死体の身元なんですが、調べたところ車の免許を確認したんですが……ミッドの住民で独身女性なんですけど病で

伏せてる弟さんの入院費用を貯める為にちょっくら危ない橋でも渡ったか解りませんが……風俗勤務で働いてたらしいですよ。で、歳はハラオウン執務官と近いんでしょうな。免許証の生年月日を見りゃまだ二十前半とまだ若い女ですぜ」

「……ご苦労様です。引き続き引続き何か分かったらまだ見習い執務官みたいな者ですけどあちらで死体の調査をしているティアナ・ランスター執務官か私にお願いします。カミイズミさん」

「へい、了解しました。にしても、私なんかよりちゃんとした捜査官をつけりゃいいんじゃねぇかと私としちゃ思うんですが……」

「本来なら貴方の仰る通りなのですが、最近では、裏の世界と絡む事件が多発しております。それに、管理局内で裏の世界と絡む人材の一人で貴方の名前が挙げられたのです。モンド・カミイズミ陸曹」

「ったく、それも何かの噂じゃないんすか？それに、私なんかが裏の世界とそんなに絡むような危ない橋は渡りませんよ。それこそ、ちゃんとした捜査官にでも潜らせりゃいいじゃないっすか」

金髪で長い髪にモデルのような体型が目立つフェイト・T・ハラオウン執務官という若手のエリート執務官に不揃いだと呟く男モンド・カミイズミ陸曹は、成人男性の平均的な身長にしてはやや低く最近じゃ１７０ｃｍも及ばないのと三十路寸前な年齢でやや体力が衰えているんじゃないかと気にしていながらも細い目付きでやる気も見

えない雰囲気がをも出しながらもボサボサとした髪をかきながら目の前に見える死体を眺めながら

死体の付近でやや顔を青くしながらも真面目に捜査しているストレートなオレンジ色の髪が目立つティアナ・ランスター執務官をやや不安そうに見つめていた。

因みに、カミイズミ陸曹は魔導師でなく一般局員で殺人現場の死体を扱う他に街中の警備くらいが主な仕事らしいが、同僚だった者からは、暇そうに街中をぶらつきながら昼を過ごしているというらしい。

だが、夜になると警備だと言いながら夜中の2時過ぎまで行うのが主らしいが

遅い時は、明朝の5時くらいになってから戻る事もあるらしく過去に後を追っても見失ってしまいなかなか足取りが掴めなかったから何かあるんじゃないかという噂もあるが

フェイトが彼を捜査に加えた主な理由として挙げられるのは、裏社会について捜査していた捜査官が、裏の世界の人間とやり取りしている姿を目撃してしまったという衝撃な事実であり

証拠の写真を彼に見せたのだが、彼は細い目付きなままその写真を

眺めながらも自分にはあまり関わり無いと言わんばかり何事も無いよう答える。

「まぁ、裏社会なんざ足を突っ込もうとしたい奴なんざあまりいませんからね。私の場合、そういう上官に頼まれて使者みたいな形で行ってただけで、あまり関係を持ったりなんかしちゃいませんよ」

「ですが、貴方が行う夜勤での見回り時間はあまりにも長過ぎます。それに、写真で写ってるとこは、裏社会でもそれなりに危険なとこらしく私達でも迂闊には踏み込めないのですよ」

「へぇ～そりゃ知らなかったですな。まぁ、とか言っても私は自分の世話をしてくれる上官に頼まれた通りの場でちょっくら会う機会は御座いましたが……ったく、魔力もねぇ私なんかにそんな危険なとこへ送り込むなんざ何を考えてるんすかね……」

「本当、何故貴方をそこに送ったのか私も気になったので、貴方の上官から直接聞かせて頂きました。どうやら管理局に勤める前まで、貴方が裏社会の人間として生きてたという事実は地上本部でも公には出来ません。とはいえ、裏の世界と絡んでいる事件があれば、どうしても貴方みたいな人材が不可欠だというのもあり地上本部は、私達に貴方の素性を明かさなかったのでしょう」

「ほぅ、たかが落ちぶれもんな奴一人にそこまで目をつけてお調べになったとは……大したもんですよ。とはいっても、貴方に裏の

素性なんざ話す気はありません。裏を知るっつうのは、それなりの覚悟があるか分からねぇ若い姉ちゃんに語る話じゃありませんからな。では、私はこれにて帰らせて貰いますよ。何分、最近じゃ夜勤続きでろくに休んじゃいねぇもんでしてね……」

カミイズミは、凝ってる肩を揉むような動作をしながらフェイト達の場から去って行く。

その後、ティアナが調べた結果から死体となって見つかった彼女が裏の世界に携わってると思われる管理局内でもブラックリストに挙げられていた”企業”の名前が記されている名刺が見つかった事から彼女達と裏の世界を渡り歩く”仕事人”との勝負が始まるきっかけとなろうとは、誰一人気づく事は無かった。

第一話"募る仕事仲間"（前書き）

ストックさせておいたものを投稿させて頂きます。

因みに、後４話もあったりしますが追々させて頂きますのでその時はよろしくお願い致します。

第一話"募る仕事仲間"

――カミイズミサイド――

ったく、今回の依頼主がどんなもんか覗こうかと思ったんだがその前に、ＪＳ事件などで活躍したフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官とティアナ・ランスター執務官っていう若い姉ちゃんに目をつけられるなんざついてねぇな。

まぁ、今回だけは奴等から尻尾を巻いて逃げ切れたとは思いながらも俺は、裏で昔世話をしたセキサイ・ヤギウっていう堅物で無口な事で知られる管理局局員と話を付けて５年も前にミッドの空を騒がせた違法科学者ジェイル・スカリエッティっていうちょっくら変わりもんだが

あの事件で世間を騒がしたくらいなだけもあって切れ者な野郎と最近、不足気味になった裏稼業の人員でも渡して貰えないか再度、話を聞きに来た。

「で、今回お前さんにわざわざ話をつけて来た理由は何なのか分かってんだろうな？」

「あぁ、あの堅物な奴から君達の”仕事”について聞かせて貰ったが私が管理局相手にゆりかごを起動させるより前から行ってたとはね……依頼人の賃金を受けとれば誰であろうと殺してしまうなんて、なかなか面白そうな話じゃないか」

「……あの無口な野郎がそこまで語るなんざ珍しいな。まぁ、こっちも3年も前まで仕切ってた元締めがあの世に逝っちまったり、他の連中も行方知れずな形でこっちもまた人手を集めなきゃならなくなったんだ。それに、協力してくれるんならちょっくらここでドンパチを起こすとこを見せてやる。とはいっても、連中にモルモット材料にされちまったもんをテメェに披露するだけなんだけどな」

「フフ、EC細胞とやらで君の細胞が適合してしまったんだったね。君の力が見れるなら私としても興味深いところだ。良いだろう。一応、話をつけたところ私よりも興味深く賛同してくれる者がそろそろ分かる」

俺が、自分の戦闘服でもある黒い着物へと身に纏い盤若のお面を被りながら愛用してる”ムラマサ”と名付けた妖気なる紫色を漂わせる日本刀を構えると発見して見つける魔導師達がバリアジャケットに装着して杖を装備する連中が数人いたが

俺は、鞘に納めている刀を抜き取り奴等の動きを見計らいながらも動揺する一人の背後をとって背部を思いっきり刺し込みながらも屍と化した野郎の姿にビビる奴の前面に思いっきり斬り込み慌てふた

めく三人目に胴を決めるかのよう胴体を真っ二つに斬り捨てると

後方にいる４～５人くらいいる連中が杖を構えながらビビりながらも接近する姿に俺は、思わず氷りついた表情のまま奴等が放つ砲撃魔法の軌道を刀一つで反らせつつ中央にいた奴に刀を深く突き刺しながらも左右近くから迫ってくる連中が杖で砲撃を放とうとしたところを右サイドから瞬時に野郎の背後を深々と刺し込みながら斬り捨てて微笑む色っぽい姿をした女性が現れる。

「やっぱり、貴方の殺し方って容赦ないわよね～」

「……あんたに言われたくねぇな。カレン・フッケンバイン。で、ようやくＪＳ事件の主犯者から何人か”仕事人”が決まるそうだ」

「へぇ～良かったじゃない。これで私達のとこにもプラスになれば尚更ね。で、これ終わったらたまには私と帰らない？」

「あぁ……お前さんの一家か。悪かねぇが俺もどうやら報告した通りのフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官っつう面倒な奴に足を掴まれそうなんでね。もう少し管理局員を演じながらあそこでのんびりする事にするわ」

「やっぱり面倒な事態になったのね。やっぱり、そっちにはアルを派遣させとくから危なくなったら戻ってきて頂戴。貴方は私達の中

でも殺しに情がないし迷いも無い上に私と似た何かを感じるからこれからも一緒にいてくれると助かるのよ。後、そいつらの事だけど殺しだと色々と面倒になるからもしもの場合になったら深手を負わせる程度なら許可するわ。って言っても貴方の”ディバイダームラマサ”って刀が血を吸う度に斬れ味が上がる危険度が高い品物だからそういう点じゃ難しかったわね……まぁ、面倒な事態にならない事を祈るわ」

「まぁ、お前さんが派手に暴れなきゃ面倒な事態も回避出来そうなんだが……はぁ～お前さんが来ようが来まいがどっちにしろ俺の表の仕事が増えた事には変わらねぇか……」

俺は、話し込みながら二人で斬り捨てた無惨な屍を眺めつつビビりながら連絡しようとしていた責任者らしき野郎をぶっ刺すとまだ杖を構えて抵抗する魔導師達を眺めていたが

この混乱に乗じて脱出したスカリエッティという奴から話だけしかトーレとかいう鋭い目付きで、野郎の首筋を締め付けるスタイルのいい女が腹黒そうな金髪美女と一緒に現れた姿を目撃する。

「なかなか速い動きじゃねぇか。まぁ、即戦力とか考えちゃいなかったが……この”仕事”に慣れてくれりゃどうにか使いもんになるか……で、そこのメガネは”情報屋”紛いな仕事に慣れた奴が残したミッドの裏の事情について残ってる情報がまんまある筈だからよ。こっから出たらそっちで住み込んで働いて貰うぞ」

「へぇ～ドクターから聞いたけどなかなか面白そうな”仕事”なのねぇ～後、私はメガネじゃなくクアットロよ。おじさん」

「……トーレだ。先程から貴様等の戦いを見せて貰ったがなかなか興味深いな。で、あそこにいる女は誰だ？」

「あぁ……お前さん達もたまに会うと思うがあれは、この”稼業”の”二代目元締め”といったところだな。俺がこの”稼業”を再び始めたのも管理局っていう偽善団体と殺り合うのもあるが、あの人が面白いからっていう理由で手を結んでるだけだしな」

「まぁ、付け加えるんだったら私達は一つのファミリーみたいなもので、この人が私達の行動に管理局が目をつけてられないくらい派手に暴れてるだけなんだけどね♪本当、便利で助かってるよ」

気付いた時には、カレンがニコニコと手を振りながら用意した脱出用のルートを一家の連中に手筈していて

俺達は、何事もなかったかのようにミッドチルダの裏社会エリアへと戻り

二人に今後の打ち合わせ場である人気（ヒトケ）もない埃まみれで古ぼけた喫茶店やら新たに雇った二人の住む場で元は、昔組んで今は居なくな

った情報屋だった奴が使ってた家を案内し終えるとクタクタに疲れきった身体を休ませる前に夕飯でも済まそうかと冷蔵庫の中を見ると空っぽになっており

隣で昨日買ったばかりの食材が消え果てており

変わりに隣で人の衣服をひっぱりながらご飯粒が幾つかついてるどんぶりを片手に持った少女みたいな奴がニッコリと笑っている。

「なぁ？まだ、食い足りねぇんだけどこれからどっか美味しい店とかに行かねぇか？」

「ハハッ……だから、俺はお前さんが来んのを望んじゃいなかったんだよなぁ……ッたく、1ヶ月分の白い米に農業エリアに隠れてる連中からちょっくら安くお裾分けして貰った牛肉やら野菜が一気に消えてんぞ」

「あぁ～だから思ったよか美味しかったのか……また、貰ってこりゃ良いじゃん」

「……馬鹿野郎。”仕事仲間”だった奴等がその旨い野菜や肉を安く仕入れたんだ。それに、前の仕事人仲間の大体は金に煩い奴等しか生き残っちゃいねぇ分こういうもんを仕入れるのに最初しか安く売ってくんねぇんだよ。ッたく、しゃあねぇ……明日から”表

の仕事”でもやって貰うしか無さそうだな……」

「……ちょっと待て。何かめんどい展開になってないか？」

「あぁ、お陰様で面倒な展開になったな」

その後、俺はこいつと一緒に行きつけの蕎麦屋で夕飯を済ませたが隣で足りねぇ足りねぇと騒ぐ大食い娘が何杯も食うせいで俺の財布の中身がなり軽くなった。

始まる"仕事"（前書き）

何故だろうか……

管理局という組織が好きになれない上に

聖王教会を見ると創○学会や統一○会を思い描いてしまう…（^—^；）

始まる"仕事"

――カミイズミサイド――

ようやく、仕事仲間を集めた翌日にいきなりフェイト・ハラオウン執務官、ティアナ・ランスター執務官と共に衛星拘置所へ向かうと昨日、カレンと一緒に殺りまかした屍が数知れねぇくらいあり

ランスター執務官にフェイト執務官も含め調査してた捜査官達や管理局局員など顔を青ざめてた様子で中には吐き気まで催す野郎までいた。

ッたく、屍にした張本人が言うのもなんだがテメェ等みたいに嫌々調べられる死体が何だか切なく感じた俺は溜め息を漏らしながらも一人遺体の始末と仕事を始める。

「あぁ～皆さん。随分と失礼な連中じゃないですな……誰もこんな目に遭いたいって可笑しくねぇってのに、そっから目を反らすなんざ随分と失礼じゃありませんか……」

「……そうですけど、カミイズミさんは、よく平気でいられま

すね」

「まぁ、務めてこの方ちょっくらこういう遺体と付き合えば嫌でも慣れますよ。だかな……ランスター執務官。どんな理由があってこんな生き地獄みたいなもんを捜査する事になってんのか私には分かりませんが、テメェで引き受けた仕事ならしっかりやるのが筋ってもんざゃありませんか。まぁ、それでも、見たかねぇんでしたらこの場から退く事を勧めますがな。でなきゃ、ここで仕事なんざ出来ませんぜ」

「……カミイズミさんの言う事も解りますがこの様な現場で体調を壊す人が現れても無理はありません」

「ハラオウン執務官。どんな現場でも人が無残に亡くなってんだ。これから、どんな現場でどんな死体を見るか分からねぇっていうのにそりゃ甘過ぎやしませんか？まぁ、一番ついてねぇのはあんな死に様になった奴等だろう。そんでも、あの遺体が見れないんなら執務官達とはいえ現場から失せる事を勧めますよ。正直、気持ち悪いだの体調壊すだのと騒がれちゃ足手まといですんでな」

ちょっくら一言キツく言ってみると周りの連中でさっきまで青い顔してまともに捜査の一つもしなかった奴等が急にやり始めたという現実に俺は、追い返す気で言った筈だったんだが

さっきまでと現状は大して変わらねぇ筈だっていうのに集められた

奴等が急にどういう形で死んだのかまで調べていたのには正直、唖然としちまった。

そして、周りが捜査に熱中してる最中、今度からはウチで居候しながらも飯という飯を食い尽くすあいつにでも思いっきり暴れてもらって建物をぶっ壊すくらいにでもやってみるかと密かに考え込んでる最中

さっきまで、青い顔をしていたハラオウン執務官が俺に礼をしたいから今度、食事でもどうかと誘われてたが

何分、最近は仕事に追われてばかりでろくに休んだ気がしねぇ日々が続いてたんでやんわりと適当に断っといた後

仕事でようやくキリがついて資料を纏めて休んでた時

ハラオウン執務官が目の前で囚人服を着ていたスカリエッティを睨みながらも幾つか質問してたが

奴が俺等の事を話さないよう適当に昨日の状況をまるで凄まじい光景でも見て感動した感じで語ってたのには、流石の俺も内心引いたが

ただ、ＪＳ事件に加わってたランスター執務官とハラオウン執務官

のあのふざけんじゃねぇと言わんばかりな如何にも感情的にキレかけてる姿には、何か重い空気で耐えられねぇ様子だったんで別のとこで休もうとしたところ尋問を一通り終わらせたハラオウン執務官から漂う怒りに触れそうになった俺は、思わず彼女から逃げ出しそうな気持ちで一杯だったりした。

その後、誰もいねぇところで一休みしてた頃

クアットロが情報屋から”仕事”に関する話でも見つけたかの如くモニター越しから手を振った状態で”はぁ～い”と笑いながらこっちに声をかけて来たんで内心、何か気が狂う奴だと認識しながらも彼女から”仕事”の話を聞く為

周りに誰もいねぇか見渡しながら話を聞く事にした。

「で、こちとらあの金髪執務官が変わりもん科学者にぶつかって機嫌悪そうで空気が重いからさっさと帰りてぇ気分だ」

「ああ～それなら後でこのクアットロが知ってるプロジェクトFっていう話を教えて差し上げますからその内、面白く教えてあげるわ～で、”仕事”の話なんだけど今回の”仕事”は地上本部でレジアス派だった上層部が”人体兵器計画”なんて面白そうな話で実験台にされた人の身内がちょっとした企業の社長らしくて娘をその上層部の連中に弱みを握られたまま実験台にされて亡き者にされちゃったらしくて大した依頼料じゃないんだけどこの話乗ってみないかし

ら～」

「構わねぇがその計画の中心人物がどんな野郎か解ったら名前やら部署などくまなく調べといてくれりゃ助かる」

「分かったわ～で、ちょっと気になってたんだけどここってクラナガンに近い割には、あまり連中がうろついてないのね～」

「まぁ、そこは訳ありやお尋ね者になってる連中の隠れ蓑だかんな。たまに、管理局の連中が張り込みに来ねぇ一つの訳ってのも大体は、ヤバい奴等がゴロゴロいるからなんだが、基本的には来ねぇから大丈夫だろうよ。とは言ってもクラナガンの街中には面だしにくるんじゃねぇぞ。何せ、そっから外に出たら捕まる仕掛けになってたりする。まぁ、管理局内でもクラナガンが裏社会に興味あんのは、あっちで勢力を高めてるシミズ一家っていう裏組織が地上本部のお偉いさん達と絡んでるからな。それに、シミズ一家が管理局内で潜りを入れてる限りそっちへ捜査出来ねぇんだけどな」

シミズ一家について話し込む間、何か腹黒なメガネが興味深く聞いてたがその間に、ハラオウン執務官から仕事をするよう注意されたんで

渋々、休み終えた俺はモニターを切り再び遺体処理をしながらも何か証拠が残ってねぇか確かめたりし、特に残っちゃなかったんで

適当に纏めるもんを纏め今日の仕事が終えた後、今回のターゲットがどんな野郎か確めたところどうやらレジアス派で中心的人物でもあるウォーリー・ロックウェル少将っつう野郎らしく表向きじゃ亡きレジアス中将に次ぐ陸での硬派として知られ今じゃ管理局内でも要として必要な野郎の一人なんだが

裏じゃ魔導師を必要としねぇ為にもちょっとしたあいつが自ら管轄下にしてる第３０管理内世界ってとこで企業を起こしてる”チャーリーズカンパニー”っつうチャーリー・ワトソンとかいう社長さんと絡んで”人体兵器開発”を進めてるって訳だ。

まぁ、確かめてみりゃなかなか興味深いが他の世界に行くとなると協力関係だったシミズ一家のチョウジロウっていう頭に話をつけなきゃならねぇんだが

何分、借りる費用だけでも金がかかるからっていうのもあって元締めを兼ねてフッケンバイン一家の頭もしてるカレンがスポンサーという名の傘下に治めたと聞いた時

シミズ一家のチョウジロウの場合、あいつに命取られるかどうかっていう形で面を下げたらしい。

まぁ、今回の場合はクラナガン市内にあるちょっと飲み屋で密約を交わすらしいが

何人か見張りの連中がいるらしいが元締めから殺ると目立つからと止められているＪＳ事件でも主犯者ジェイル・スカリエッティを捕まえた事でも名高いハラオウン執務官がいるらしい。

まぁ、そいつに顔を知られてるトーレや潜入で活躍させるアルにターゲットや店内の奴等全員を殺って適当なとこで退いて貰う事にして俺が面を隠したままムラマサを振るって殺らない程度で手を抜くという形で始末するという打ち合わせにした後

いよいよ、俺達の仕事が始まる。

第三話裏稼業と執務官（前書き）

ふぅ～

本当、ここまで読んで下さりありがとうございます。

としか、言えませんね…（^__^;）

第三話裏稼業と執務官

――フェイトサイド――

勃発しる管理局員連続殺人という酷い事件もあって今夜、私はウォーリー・ロックウェル少将に護衛の任務を頼まれたのは良いのだけどちょっと中からピアノで弾く曲が外まで響く居酒屋みたいなとこだけど

何か煙草の煙が臭って個人的には、苦手だがロックウェル少将はそんな私を気遣うように心配してくれたのか

店内の禁煙ルームで警備をするよう命令が下ったので店の奥にあるＶＩＰルームまで少将が中へ入っていくのを見届けて周辺を警備していた時だった。

突然、誰か悲鳴を上げたのでそこへ向かうと何人かが何者かに斬られており

その斬られた人に近寄ろうとした瞬間

背後に地塗られた刃物がこちらの首筋に当ててており私は、思わず背後から悪寒のようなものを感じながらも相手の足首を踏もうとしたところを向こうから距離を離してくれたので

私は、その場で変身してインパルスフォームになって般若の仮面を被って顔を隠しながらも時代劇などで出てくるお侍さんが着こなしてるような和服と日本刀を正眼に構えてる男がいた。

「……何故、この様な事をする」

「……まぁ、何でと聞かれても答える野郎なんざいねぇだろう」

「……変声機で声を隠してるところ貴様は、地上本部で大量殺戮をした犯罪グループの仲間だった奴か」

「ほぅ、なかなか鋭い点を突くじゃねぇか久しぶりだなぁ～だがな、ちょっくら寝んねしとかねぇと目の前で血の惨劇を見ることになるだろうからさっさと黙らせておくか……」

男が剣を構えたまま動く気配を見せていなかったが私は、この男を知っている。

過去に、地上本部を襲撃し何十名もの管理局員が殺害された事件が裏の人間達によって起こされ管理局内では、本部での局員以外は極秘扱いされている事件だったのだが

この事件の前まで起きてた管理局員や管理局と関する企業の人達が殺害された事件が一旦終えたかのように見えたが

最近になってから再び、管理局員が殺される事件が少なからず勃発し今日も拘置所で何十人もの管理局員が無惨に遺体となってた上にＪＳ事件で捕まっていたトーレとクアットロだけが脱獄した形となっていたので私は、スカリエッティに尋問をしてみたが

彼は、何も見てなかったが久々に心が踊るような悲鳴が聞こえたとふざけた事を呟いていたので思わず彼の頬を平手打ちしてしまいちょっと騒ぎになりかけたけどそれは置いといてその後、奴がいたアジトの跡も探ってみたのだが何も痕跡が見つからなかった為

”クラナガンの裏社会”又は”シミズ一家の縄張り”と呼ばれてる管理外エリアでの捜査を明日からでも行うようロックウェル少将に頼んでみたところ変わりに彼の警備に着いたのだが

今の私には、あの連続殺人犯でもある謎の仮面男を逮捕する事しか考えられなかったせいか

気付いた時には、真ソニックフォームの姿で彼を薙ぎ飛ばそうと距離を詰めていた。

「……動きが見えねぇからって俺が動かねぇと思ったか？たかが、屍を見ただけで心が乱れすぎだ」

「カハッ……き、貴様ぁぁぁ！！」

「……貫通されてんだ。ちょっくら黙った方が身の為ってもんくらい学んでおけ」

あの任務以来、あの般若の仮面を被った男に背後から突き刺された後気付いた時には、聖王病院の個室にいたせいかまだ傷が痛むけど目の前には、心配そうな顔をしているなのはとはやてがいる。

「……ようやく目覚めたようやな。フェイトちゃん、何日も意識が戻らへんから肝を冷やしたんやで」

「……そうだよ。それに、はやてちゃんから話を聞いたんだけど一昨年の地上本部で起こった襲撃事件から追っている殺人犯を追ってたらしいね」

「私の上司だった人が目の前で殺されたからね。色々と今まで調べてたんだけどなかなか尻尾が掴めなかったから裏社会問題に携わってるロックウェル少将に協力を得ようとしたんだけど……」

「……もう一人で追わん事を約束するんやで。ロックウェル少将は、殺されてもうたけど今度から何かあったらウチにも相談するんや。これは、約束やで……エエな」

「……はやてちゃんの言う通りだよ。ただ私は、ヴィヴィオの事もあるからあまり力になってあげられる様子も無いけど無理だけはしちゃあの娘も悲しむから私とも約束だよ？」

古い仲からの親友に励まされた私は、その後、ティアナやギンガ・ウェンディ・チンク・シャーリー達があの事件を調べてくれているらしいが誰が私以外に店内いた人達は、既に遺体となってしまったらしく

ロックウェル少将もチャーリーズ社の社長チャーリー・ワトソン氏と店内にいた幹部達も遺体になっていたらしい。

ただ、気になっていたのはその店内の奥いわばロックウェル少将が入ったところからは、火薬の匂いが漂っており

数弾射たれて亡くなったのと首を絞めつけられた痕が残ってたらしいが

私の近くにいた人達の遺体からは何者な斬られた痕跡が残ってたという。

だが、斬り込んで殺した犯人を私は知っている。

前に事件で顔を隠し私の上司を殺めた奴と似ていたが

あの時は、強力なＡＭＦが張られたのもあり襲って来た連中を逃がしてしまう形となってしまった。

その線から最初は、スカリエッティが絡んでいたのではないかと捜査を進めていたが奴が脱獄した経緯も無かったのもあり

管理局側は、彼からガジェットを含むＡＭＦ機械に絡んだ兵器の設計図か何かを手に入れた者がいたんじゃないかと考えているらしいが

その証拠が見受けられないという理由で彼に関する尋問は、断念せざる終えなかった。

だが、何故かトーレとクアットロが脱獄までしたというのが引っ掛かっていたのもあり

何処の勢力が絡んでいるのかを調べ直す必要があると考えた私達は、はやてがシミズ一家の縄張りという管理外エリアへと入る為にクロノや母さんからも前から反対されていたのだがどうにか許しを貰えた。

その代わり向こうへ行く監査役としてカミイズミ陸曹が派遣されていたが

私達との待ち合わせ時間から二時間後、寝坊したまま何の緊張感も無く彼は、欠伸をしながら現れた事が原因で

彼からみたら初対面であるチンクとギンガの両面から拳を食らう羽目になったにも関わらず

何故か、いつもの私なら心配をするハズなのにあの時の彼からは、溜め息しか出なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7812x/

魔法戦記リリカルなのはForce外伝～フッケンバイン一家と裏に生きる者達～

2011年10月22日02時17分発行